

小林一茶の自己俳諧の確立と宗教性 — 家族・家庭の崩壊と他力本願について —

中田雅敏

Kobayashi Issa, Establishment of his own Haikai and his Religious Mind
Family ; Destruction of Homes and Salvation through the Benevolence of Buddha

キーワード 大家俳諧、通信講座、自己確立、新句創出、家庭と家族

はじめに

小林一茶は文政二年の日記、正月七日の条に「江戸本所割下水・溝口十太夫素丸門人・一茶」と記している。この時一茶は既に故郷柏原に定住し、五十七歳で『おらが春』を完成させた時期である。このような記録から考えると一茶は晩年においても素丸門を称していたということになる。一茶は寛政元年（一七八九）に奥羽行脚を終え、続いて六年間に及ぶ西国行脚の旅に出ている。この頃の一茶は一所不住の貧寒の行脚俳人というイメージが強い。三十九歳の享和元年（一八〇一）に一度故郷柏原に帰る。この時は父の看病が目的であり、五月二十一日の父の死を看取った後に再び江戸に戻った。出郷して以来二十四年ぶりの帰郷であった。この二年後の文化元年（一八〇四）に一茶は四十一歳で隅田川沿いの相生町五丁目の借家に移った。恐らく一茶はこの時をもって一戸持ちの世帯主となった事であろう。

一茶が俳人として詩囊を養った江戸俳壇は自派の葛飾蕉門、^{〔注1〕}曾遊の上方俳壇、そして江戸俳壇の三派が鼎立していた。そうした状況の中でも一茶が属した葛飾蕉門派も二派に分裂していた。公職や家業に従事しながら四家蕉門（其角系・雪門系・杉風系・太白堂系）と同盟関係にあったグ

ループと、^{〔注2〕}黒露や竹阿のように諸派と交わり、長期にわたって諸国を行脚した俳僧グループに分かれていた。竹阿に師事した一茶はその中でも一門にあつて異色の存在であった。貧寒行脚俳人としての在り方も最早動かし難いものとなっていた。そうした一茶の広範な俳壇活動は葛飾派の公職にあつた一部の幹部俳人には無軌道と映り、埒外の人物としての烙印を押しされていたようである。そうした中で一茶はどのように生きたのであろう。

一、一茶主催の通信講座

一茶は食を求めて市中や房総地方を渡り歩きながらも素丸門を主張し地方行脚を続けた。一方この頃の有様を記した『文化句帳』には、「国に行かんとして心すすまず」と書かれていたり、「世路山川ヨリ嶮シ」とあり、無為漂泊の嗟嘆と貧懐とが綴られている。一戸を持ちながらも江戸市中では生活が成り立たず、心中に長明の無常を期し、芭蕉の隠逸を求め俳諧行脚を実践した一茶であったが、遂に夏目成美の随齋会、鈴木道彦の十時庵会、巢兆会、など他門との交流に頼らざるを得なかったのであった。一茶が故郷柏原に帰住を願わざるを得なくなった背景には、同門の中にこうした事

情があったからであろう。(注3) 九世馬場錦江が嘉永年中に作成したと伝わる「葛飾蕉門分脈系図」には「小林一茶、文化年中一派の規矩を過つによつて、(注4) 白芹翁永く風光を絶す」と記されている。葛飾蕉門中で武門を出自とする俳人や、保守閉鎖的な一派から見れば身軽な漂泊者一茶は一門になじまない異端者と見られたのかも知れない。

一茶はこの頃から享和元年(一八〇一)に弟仙六と継母との間に取り決めた遺産相続についての実行を迫るべくしばしば故郷に帰る様になっていく。江戸俳壇において生計を立てる上で何らかの不都合が起こっていたと考えられる。文化五年(一八〇八)に一茶は遺産相続に関わる書類を村役人に提出するべく長期の帰郷をした。江戸の豪商夏目成美は故郷に戻っている一茶に一通の書状を送っている。

とかく、とかく、なつかしく在候、例の貧俳諧、貧乏人の友もなくて困り入り申候。勿々早く立戻り給はんをまつのみ。先日谷中の一瓢上人に招かれ、一泊泊まりて俳諧いたし候。其夜探題に、

花すゝき貧乏人をまねくなり

とくちずさみ申候は、闇に先生の事をいひ出したるなり。

一茶の俳風を「貧乏人の貧俳諧」と言っているように、貧趣は一茶の俳諧シンボルとなっていたようであるが、鈴木道彦は『蕪本集』(文化十年)に「一茶が清貧を尊む。塵とては梅の古葉を庵の雪」と記している点から考えるとそれは「清貧」と見られていたような節もある。しかし四十六歳にして妻子を持たず、一家を持たず、田舎わたらいを続ける一茶は、真実貧しかったのであろう。この時期の一茶の句を記してみよう。

秋風や行く先々は人の家

(享和三年)

秋の風乞食は我を見くらぶる

(文化元年)

雨だれの有明月やかへる雁

(文化二年)

身ひとつや死なば簾の青いうち

(同)

又ことし娑婆寒きぞよ草の家

(文化三年)

節木候のみむきもせぬや角田川

(同)

夕乙鳥我には翌日のあてもなし

(文化四年)

鉄の罰思ひつく夜や雁の鳴く

(同)

名月の御覧の通り屑家哉

(文化六年)

故郷の袖引く雪が降りにけり

(文化六年)

こうした句には風趣と言うよりも、生活に窮乏している貧者のつぶやきが聞こえて来る。「乞食に見くらべられる様」は滑稽やうがちという俳諧発句独特の世界を越えている。生活者の嘆きがあふれている。そうした感情は一句に限らず俳文にも顕著に見出すことができる。享和三年の句日記には「江戸本所五ツ目大島愛宕山別当一茶園雲外」という書名が記されている。このころ一茶はすでに通信による句会を持っている。今で言えば「月刊一茶」とでもいえそうな刊行物であり、現在その刷り物は八種類十一枚が残っている。その裏は句稿など一茶の雑記が記されているところから、雑記帳として綴じられたものと思われる。題字は『一茶園月並』と書かれているので、毎月一茶を中心にした人々が作品を提出し、集まった作品を刷り物にして各地の句友や弟子に返送していたものである。通信句会と言うことになり実に優れたアイデアである。今から二百年前に通信制講座を開いたのである。「一茶園月並」は当時の一茶社中、下総・上総・安房地方に多く在住していた熱心な投稿者が参加している。残されている資料からは、投稿者は定期的で毎月投稿していた事がわかる。こうした投稿句を添削し批評選評をする必要から一茶は一戸を持たざるを得なくなったものと思われる。『文化句帳』には「本所五ツ目愛宕山別当」と記されている。三十六年間の江戸生活で初めて得た戸主、世帯主であった住家である。おそらく隅田川沿いの愛宕山勝智院の什物などを仕舞置く一室を間借りしたものであろう。

一茶の俳行脚は、下総の馬橋、流山、我孫子、布川、田川、上総、木更津などがほぼ定まったコースであった。そうした中でも馬橋の大川斗圍、

流山の秋元双樹、布川の古田月船、富津の織本花嬌などが一茶を温かく迎えてくれたのであった。この期の一茶の句にはそうした人の情に頼る心中と、乞食放浪の自嘲的気分がただよっている作品が多い。

霜置やこれでも江戸の一住居 (文化三年)

柳原にかかれば、豊島町とやらんに出火ありしとて、人々かへる。僅か咫尺の中にもかかる変はあるなれ。彼法師が明日を待たで十寸穂のすすき問ひに行けるも、ことはりなる哉といよいよいそぐ。御徒町を通る。爰は三月四日の火にかかりていまだむなしき地のみ多く、草花の所得兒にひらく。

葬の下谷せましと咲きにけり

朝貌の上にもあるやはやり花

根岸

山吹のさし出がほして垣根哉

忍ずの池

畑へものさばり出たり蓮の花

からさけに喰さかれたる紙衣哉

藪竹の曲がった形に秋は来ぬ

一茶は正式に二六庵という葛飾派公認の庵主に就任し、宗匠としての活動を始めたのは寛政十一年(一七九九)頃からで、文化元年、文化二年には画期的な通信句会「一茶園月並」を開催し、一般の俳諧師同様の宗匠活動を行っていた。今で言えば「インターネット句会」とか「Eラーニング講座」ともいうべき先端を行く俳諧活動であったが、それも僅か二年程度でやめてしまった。何故にやめたのか決定的な資料は伝わらないが、投句者の減少とか月並そのものに対する一茶自身の深い懐疑心があったのではなからうか。或いは講座受講者が対面受講や集団指導講座による「ビューマンラーニング」をもとめていたのであろう。

宗匠になるということは一結社を統率指導することで、作句の実力だけ

でなく結社をまとめる力が必要であり、集団を運営する資金繰りや政治力というものも要求される。芭蕉が深川に退隠したり、蕪村が絵に興じたのも、文学と相容れないこの世俗的な政治力に対する拒否感やわずらわしさが心の多くを占めていたからであろう。一茶にとってもかつては夢にまで見た宗匠の地位であったが、月並を主催して種々なる問題に遭遇し、業俳のばかばかしさを嫌という程味わったに違いない。そんなことから一茶は江戸本所五ツ目大島町を匆々に立ち去ってしまったのである。僅か二年の本所での生活であったが、ここではやはりいくつかの佳句を残している。

淡雪や人で埋めし江戸の町 (寛政三年)

外は雪内は煤ふる栖かな (寛政四年)

内は煤ほたりほたりや夜の雪 (文化元年)

それがしも雪を待つ夜や欠土鍋 (同)

はつ雪や竹の夕べを独寝て (同)

初雪や故郷見ゆる壁の穴 (同)

一茶は文化元年十月、本所五ツ目大島から同じ本所相生町五丁目に転居をしているが、これらの句はその直後の作品である。新居を得て心を弾ませていくような作である。この家は一茶の江戸住居のうち最も整っていた家らしく、来客も頻繁にあつて庭には竹などが植えられていた風趣ある句も見られ、「雪を待つ」に一茶の心の余裕が感じられる。しかし「俳諧師」は俳句を教え、他人の作品に優劣の判定を下し、生計を立てる者であるから、判者とか点者という別称も持っていた。一茶も葛飾蕉門の流れを汲む^{〔注5〕}蕉風俳諧師である。江戸ではその他の門流もあり、貞門以来の点取り連歌を引き継いだゲーム感覚の点取り俳諧もあった。多くの業俳はそのようなものと心得て点者としての生計を立てていた。芭蕉はじめは談林派の点者として名声を得たが、やがてその非をさとって深川に隠棲した。芭蕉派の事跡を伝えた著『石舍利』(享保十年、一七二五)で彦根系諸家の吟詠を紹介した^{〔注6〕}。普安は「点者をすべきよりは乞食をせよ」と言ったと言われ

ている。一茶の心にも「一茶園月並」を通して点者としての嫌気がさしはじめたらしい。ここでの暮らしを捨てて、また流寓の生活にいつしか戻ってしまったようである。

上野の麓に蝸牛のから家かりて、露の間の夢のむすび所とす。きのふあたり住倦たる人のなせるわざにや、垣の薜のそれなりにて枯て、その実はほろほろ落たり。いく人の涙をかけし果てとも思われて、秋にかち増りて哀れなり。又間口二尺ばかりなる土をならして菜のようなるもの蒔けるが、雪の片隅にほやほやと青みぬ。是必ず愛度春を迎へて、餅いわふべき旦の料ならんか。壁は七福即生の守り張重て盗人の輩を防ぎ、竈は大根注連といふものを引はへて回禄を逃れんとす。荒神松はいまだ野の色ながら、横ざまにこけたり。皆ただ行末いつ迄か往果んあらましぞと見ゆるも、今は雲にや迹をくらしけん、山にや影をかくしけん。すべていづこか終の栖ならん。かくいふ我もしばしが程に、又人にかくいわれんことをおもふのみ。

身に添や前の主の寒さ迄

文化六年十二月十五日 一茶

上野坂本町の蝸牛の殻のような小さな家に住むことになったが前の住人のことが思われる。この住人もしばらくは住み着く予定であったのだろうが、今では行き方知らず。かくいう私もしばし居るだけで、また前の住人と同じように言われるのだろう。と我が身の流寓のほどを示し、この地が朝顔の産地であることを言いとどめている。江戸では菊の栽培や植木の栽培、特に近世後期には朝顔の栽培がさかんであった。文化から天保に到る時期で、一茶は「朝顔」の句を百六十句も詠んでいる。文化三年七月十三日「王子田楽見の記」には、御徒町を過ぎて王子まで来る間に焼け土と化した下谷御徒町の「牛火事」後のことを、朝顔を主にして記している。^{〔注7〕}岡山鳥は『江戸名所花暦』（文政十年）でこの「牛火事」の直後にこの上野あたりから朝顔栽培が流行し、やがて文政期に入ると、下谷、浅草、深川

方面へと波及して行ったと記している。

日記のように或月或日の行動を記し、それに句を添える句日記の『七番日記』は、この上野の仮住居が執筆されて間もない翌文化七年正月から書き始められている。横長綴の上段には、その日の天候、行動、知友の動静、見聞、観劇、神社仏閣の参詣、出火、収支、文通、風俗など生活万般にわたる事柄が簡潔に書きとどめられ、下段には、日々の即時即興の詠出が列記されているが、必ずしも上段の記事と下段の句とは一致はしない。まれに長文の記事が上下に渡るが全体は見事に統一されている。形式的にはそれ以前の『享和句帳』『文化句帳』が記事と句の記載が交互する一段式であったものが、『文化六年句日記』の過渡期を経て『七番日記』において二段式の様式に定着してゆく経緯を見ることが出来る。これは俳文における二段構成の様式の確立時と一致している。この時期に一茶の俳風も定まり、文化六年、文化七年にかけて文事全般における一茶固有の方法が確立したということもできる。

一茶は寛政二年（一七九〇）四月、二十八歳で正式に誓書を素丸に呈して葛飾蕉門の渭浜庵素丸の門人となった。葛飾蕉門の祖は山口素堂で素丸は葛飾派三世であった。素丸門に入門した一茶はその年の夏から秋にかけて「奥の細道」の行脚に赴いた。八月には秋田の名勝象潟を訪れ、同地汐越の肝煎金又左衛門の家に宿って句を練り、この時の旅を『奥羽紀行』にまとめている。この時一茶は福島県郡山の塩田茂兵衛を春を訪問している。蚕種販売を全国規模で展開していた茂兵衛は天明四・五年（一七八五）頃に加舎白雄に入門して塩田冥々と名乗って俳諧史にその名を残している。^{〔注8〕}塩田九淵齋冥々の句業と人物とをまとめた書は、明治三十年（一八九七）八月に三森松江編として明倫講社から刊行されている。その『冥々集』に次のような逸話が記述されている。

信州の一茶松嶋行脚の際、九淵齋を訪ひしが、そが衣服の浅ましければ冥々は居らずと家人のいひしより、青田まで行きしを、冥々聞きてよび戻せりと伝ふれどもまことは左にあらざ。一茶青田までゆきて青田な

るをしり、さては本宮は後になりしとて、引き戻り来しにて数日の交わりいとあたたかなりしとぞ。

一茶がいつ訪問したのかは確かではないが、この後冥々刊行の『栗蔭集』（享保元年、一八〇二）には「一茶句「思ひ入る月ははたして雨夜かな」などが収録され、また一茶門の村松春甫が文化七年に編んだ『葦草』には冥々作「太閤の御耳かすれ杜鵑」が入集している。一茶と冥々の交友はこの後も続いている。一茶という号は『寛政三年紀行』（一七九二）の冒頭において一所不住の境涯を述べた後に「しら波のよるべをしらず、立つ泡の消えやすきものから名を一茶坊といふ」とその由来に触れ、「人と栖」のテーマから芭蕉泡沫の無常観に触れている。本書は後年の文化初期の成稿で『海道記』や山東京伝の『昔話稲妻表紙』^{〔註9〕}、『雷太郎強悪物語』などの強い影響を受けており、芭蕉の俳文や紀行のなごりも著しく見えている。文化六年（一八〇九）十二月十五日の執筆による「上野の仮住居」の一文はまさに俳文における一格を確立した作品と評価して良い代表作で「上野の麓に蝸牛のから家を借りて露の間の夢のむすび所とす」はいかにも芭蕉の『幻住庵記』（元禄三年、一六九〇）を意識しており、貧屋のさまを描写して外から内に転じ、前住者の「今は雪にや迹をくらしけん、山にや影をかくしけん。すべていづこかつひの栖ならん」として前段をくくり無常をかこちつつ末尾に「かくいふ我もしばしが程に、又人にかくいはれんことをおもふのみ」と自嘲的な感想を添え「身に添ふや前の主の寒さ迄」という句を点じているのは、一茶の俳文の中でも白眉であり、身ひとつの清浄を願う生死事大の精神生活が語られて、貧と信仰とが相俟って無常観となっている。

芭蕉の「幻住庵記」は国分山中腹の神さびた八幡宮に近い幻住庵と、その所有者が門人曲翠の伯父、故^{〔註10〕}幻住老人だったと書き出している文章を一茶は最終文においている。次いで江戸深川隠棲以来十年の漂泊の境涯に及び、更に出羽国象潟の遠路のたびに疲れ果てた末にここに安住の居

を得た喜びが語られている。比叡や湖上の遠景、瀬田の景勝地などを取り巻く、周辺の山野の近景へと視点を絞る、中国の隠遁詩人に見る「睡癖山民のごとき自由無礙の境地」で暮らす庵住生活の具体的描写に移り、近くの宮守の翁や農夫らとの歓談、夜中に起こる我が心衷の妄念などを描いている。最後に「ある時は仕官懸命の地をうらやみ、一たびは仏籬祖室の扉に入らんとせしも」風雅の道に憑かれてついに「この一筋」につながってしまった半生を嘆息して終っている。このように一茶は芭蕉の「幻住庵記」を換骨奪胎したのである。葛飾蕉門に入門した一茶はこのようにして真剣に俳祖俳聖松尾芭蕉の足跡や修業の方法、そして芭蕉が辿り得た境地を指して学びを続けたのである。

二、葛飾蕉門の中の一茶

小林一茶は山口素堂を祖とする葛飾蕉門に入門して以来、その思考や行動は明らかに芭蕉を意識して行われるのであった。葛飾蕉門三世素丸は五百石取の幕府書院番であった。致仕して俳諧に専念し、芭蕉の血脈を継承したとして、天明四年（一七八四）に葛飾蕉門を称して江戸俳壇の一派閥の領袖として重きをなしていた。それ故入門するや一茶は「奥の細道」の行脚に赴いて以来旅を栖としてきた。自ら『七番日記』には、「同年十一月十七日東都を出でて、同二十四日柏原に到る。丘右衛門と言ふ者の家に寄宿して越年す。安永六年旧里を出でてより、漂泊三十六年なり。日数一万五千九百六十日、千辛万苦、一日も心の楽しむことなく、知らずして終に白頭翁となる」と記したのも芭蕉とは無縁ではない。芭蕉が深川芭蕉庵に入ったのは三十七歳であった。糊口の資を門友の喜捨にゆだねた反俗貧寒の生活実践の中から「芭蕉野分けして盥に雨を聞く夜かな」など「わび」の詩情を詠出して蕉風を樹立した。一茶は五十一歳で故郷柏原に隠棲した。「是がまあつひの栖か雪五尺」と詠んだが、半年後には「雪行け行け都のたはけ待おらん」と詠んでいる。日本の伝統的な自然美を代表する「雪月花」の

雪も農民出自の一茶にとつては悪いものにすぎなかった。

酔てから咄も八重の桜哉 (寛政元年)

象潟もけふは恨まず花の春 (同)

もう一里翌日を歩行ん夏の月 (寛政二年)

年の暮人に物やる歳もがな (寛政三年)

義仲寺へいそぎ候はつしぐれ (寛政七年)

旅笠を小さく見せる霞かな (寛政八年)

湖に鳥鳴初めて夜寒かな (寛政八年)

遠里や菜の花の上の裸蔵 (寛政九年)

あの鐘の上野に似たり花の雲 (寛政十年)

夜あらしの鹿の隣に旅寝哉 (寛政十一年)

夕陰や駕の小脇の夏花持ち (寛政十一年)

朝寒や垣の茶筴の影法師 (寛政十二年)

いずれの句も客観的な自然詠出の句であつて、清新な感性が捉えた、身近な日常諷詠をしっかりとした風趣の中に詠んでいる。伝統の正格を踏まえて的確簡潔に描写しており、こうした句は一茶晩年の作まで貫かれている。文政九年（一八二六）には「餅買ひに箱挑燈や春の雨」や「時鳥笠雲もなき山家かな」などの句を残している。蕉風の古格を守った余裕のある正統派としての力量と風格を備えている。それでは一茶調と言われるような、素材に対して一茶自ら批評をし、感想を加え、教訓を述べ自戒を込めた句はどのようにしてなされたのであろう。そうした一茶調と言われる句は、対象把握の時点に於いて一茶の自己主張が原初的に機能し、句それ自体に一種の批評を内在させている。俳諧文学特有の素材とした季節においても、その伝統的文学性を著しく希薄にするか、または形式化して消失させてしまっている。句の姿を散文化し、口語化して随想性を濃厚にしている。素材を擬人化したり、情意的に見立てたり、説教調、卑語、俗語、擬態語、擬音語、疊語、生活語、方言、諺などの手法をふんだんに盛り込み

軽妙に詠まれている。一句の対象への批評性と表現の口語性が対象把握の際に分かちがたく機能している。特に内容の批評性と表現の口語性が相乗して一茶調と称される個性的な句を作り上げている。

元禄十二年（一六九九）に井原西鶴は『西鶴名残の友』で芭蕉に対して「武州の桃青は、我が宿を出て諸国を執行（略）世の中の人の沙汰はかまふにあらず、只俳諧に思ひ入りて、心ざし深し」と称して「わび」を求めて行脚した俳魔詩人というイメージで描いている。芭蕉は俳諧の持つ通俗性を生かしながらも、知的な俳諧伝統の滑稽は、心中に圧殺してその上で叙情性を回復させている。また俳諧の本意や現世的滑稽を薄めて、世捨人的な行脚によって中世的求道の世界を求め続けた。芭蕉は『笈の小文』（宝永四年、一七〇七）によって「西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の絵における、利休が茶における、貫通するものは一つなり」と述べて中世芸道に密着し、無条件にこうした概念を受容し、自らの俳諧をこの系譜につなげようとしている。

一茶の初号と言われている菊明は『方丈記』や『発心集』を書き残した著者「菊太夫長明」こと鴨長明の中三字を略したものとされている。また「立つ泡の消えやすきものから名を一茶坊といふ」とその由来に触れているのも、長明の甚深な影響をうけているといわれている。一茶の遺稿類に記された抄記や書名には中世文芸書の名がおびただしく見出せるのである。文化六年の「上野の仮住居」の一文は、芭蕉の「幻住庵記」や長明の「方丈記」の影響を多分に受けた俳文随筆といえる。何よりも一茶が芭蕉の生き方をなぞっていたことは、一茶の諸国俳行脚の修業と作品、並びに思想が、仏教色や無常観にいろいろと生じている生涯からも推察することができる。あるいは後に一茶調と言われる特異な俳調も、実は芭蕉の句に内蔵されていた滑稽や風刺と呼ばれる俳諧性を取り出し増幅させた手法とも言えるのである。

芭蕉の『奥の細道』の「笠島はいづこ五月のぬかり道」は、雨降りだから笠がほしいと言う意を込めた地名折込の即興句で、この句の後に添えた

「岩沼に至る」のさりげない一語も、それと同音の「言はぬ間」を掛けた洒落であることは、実際は宿っていない岩沼の地名に興味をつなぐためだったのである。「のみ虱馬の尿する枕元」も尿前の関の地名を捉えた作であるから、「ぱり」と訓ずる説は、実は「し」と解説せねばならないものである。「語られぬ湯殿に濡らす袂かな」は句面には、湯殿腹のお女中の心境を秘湯湯殿山に重ねた折り込みである。「汐越や鶴はぎ濡れて海涼し」は、実景描写のように見えるが、袖をからげた痩せ法師の自画像とだぶらせているのである。芭蕉の作品は一見重苦しい嘆きを主調としているようであるが、その意図する所は理想の句境であったとしても、その句中には即興も滑稽も内包存在しているのである。

一茶はそのような芭蕉の句境を葛飾蕉門を名乗る一派や、蕩児まがいの江戸住み生活、その中から名を成している俳家、これらの人々との交流や、自ら漂泊三十六年と記した俳諧行脚から会得したものであろう。何より芭蕉以上に誇れるものは「日数一万五千九百六十日」の放浪の人生であったのであろう。元禄以降の俳壇は次第に宗匠の座が固定化し、点者候補はその中で養われていた。地方でも中央集権的な社中を形成して他流との交わりを禁じていた。そうした中で一茶のように他流と積極的に交流する者は、社中派内での制裁を受けるのは当然であった。新人が無一文で俳壇に登場するには、(注11) 樗良や(注12) 玄武坊のように雑俳点者から始めるか、一茶のように点者に寄生しなければならなかった。俳壇的野心を持つものが、点者として立つためには体制にあつて次第に地歩を固め、おとなしく順番を待つものは愚かであり、既成俳壇を外部から批判してそれらの門下生を奪取するのが手取り早いのである。現在の俳壇でもそれは全く変りない。一茶が世に出る前の中興期の俳人と呼ばれる人々の閥歴を見ると、放浪性などという言葉では表現できない孤児同然としての姿を見出すことができる。陸奥国本宮の蚕種業・俳人塩田冥々を訪ねた一茶が、あまりの汚さに、居留守に使われて追い返された逸話も、あながち事実なしとはいえない思いがする。ちなみに芭蕉文学を非難した上田秋成は、文政五年（一八二二）

に『癩癖談』という随筆を書いている。

昔、俳諧の好き人ありける。芭蕉翁の奥の細道の跡なつかしく、はるばる陸奥に下りけれ。ある国の上の御城下にて日暮んとす。一夜明かすべき家求むれどもあらず。思ひ疲れたるにその門立ちしたる翁のあるに、立ち寄りて、ねんごろに宿を求めれば、翁うち見て法師は達磨僧なるかと問ふ。いな、さる修業にあらず、ばせをの翁のながれを学ぶ者なるが、松が浦島、象潟の眺めせむとて、はるばると来たるなりといふ。翁、声荒らかにて何がしどのの御城下には、俳諧師と博奕打の宿する者はなきぞと云ひけるとなり。いかなればおなじつらに疎まれけむ、いとあさましくなむある。

俳諧修行者が各地をまわって指導をしたり、芭蕉の旅の足跡を尋ねて旅をする姿がいかにみすばらしかったので、禅僧かと尋ねられたりした結果、俳諧師であると名乗ったところ、博奕打と俳諧師を泊める宿はない、と笑われて博奕打ちと同類に扱われたことに腹を立てている悔しさを述べた文章である。一茶と同時代、あるいは一世代上の俳人には興味深い共通点がある。故郷を捨てた蕪村は、その青年期を江戸、東北、下総にさすらい、京へ出てからも丹後、讃岐を流浪したり、暁台は江戸詰めから尾張家を致仕した下級浪人であり、涼袋は広前藩の家老の次男に生まれながら兄嫁と通じて出奔したと伝えられている。青蘿も姫路の武士の子であったが、身持ち不慎のことで江戸へ追放され、白雄は上田藩士の生家を捨てて江戸に出奔した。蓼太は信州出身とだけしかわからぬ人物であった。樗良もまた若いときに放蕩を重ねて江戸に逃避行をした人物であるらしい。つまり、まともな青年期を送ったものはあまりいないのである。そうした性行は彼らの感受性の豊かさを示すものかもしれないが、一方ではそうした緊縛から抜け出すための努力が一通りのものでなかった証であり、時流に飽きて新風を求める俳壇の機運を察知して、宗匠として立つべく定めた方向が、期せずして一致したものであろう。そこに貞門、談林、蕉風と続いた俳諧革新の、その後の中興期における苦悩があったのである。革新派の俳諧師

が期せずして同時に輩出した理由があったのである。裏を返せば俳諧で名を成す程度しか放浪者の生きる道はなかったと言えるのである。

もつともそうした生き方は女性にもあった。享保から中興期にかけて都市点取り俳諧と田舎俳諧の対立から、蕉風復帰への関心が高まる中で、^{〔注13〕} 諸九尼、^{〔注14〕} 千代女、歌川などの女性も活躍した。中でも諸九は正徳四年（一七一四）に筑後国の庄屋永松十五郎の三女として生まれ、永松万右衛門に嫁したが、寛保三年（一七四三）行脚俳人^{〔注15〕} 有井浮風と一緒に上方へ駆け落ちをしてしまった。不義密通は当時ご法度の禁制であった中の駆け落ちであったから死を覚悟しての不義であったが、京都に出奔した二人は、野坡門に入門した。入門してすぐ野坡を失ったので、浮風は宗匠となったが幸運は永くは続かず、宝暦十二年（一七六二）に浮風は突然病死した。諸九は剃髪して蘇天と号して女俳諧師となり、明和三年（一七六六）に岡崎に下って湖白庵を結び、俳尼として評判になった。諸九は備中、備後、筑前、筑後など精力的に俳行脚を続けると、明和八年（一七七二）に芭蕉の足跡を慕って「奥の細道」の旅に出た。そのまま中国筋から筑紫に曳杖した。やがて駆け落ちをした夫浮風の郷里であった筑前国直方に帰住し湖白庵を結んだ。「行春や海を見てゐる鴉の子」「もとの身のものゝ在所や盆の月」という晩年の句には、惜春の物憂い情感があふれている。死を覚悟しての不義であったわけだから浮風の急逝はどれほど諸九を落胆させたことであろう。封建制度下での女性としては特異な生き様であったので話題性を触発し、俳諧史にその名を残したのであるが、俳諧にはそのような人の道を狂わせてしまうような特殊性もあったのである。小林一茶と富津の庄屋の寡婦織本^{〔注16〕} 花嬌の関係については詳にしないが、ややもすると諸九と浮風との恋仲のように発展しないとも断言できない事柄があった。宗匠になるためには天下の俳風に敏感であり、世の動きに逸早く乗じられるような行動を取らなくてはならなかったであろう。時代や新風を予知し、新風を求めて流浪する俳諧師たちの姿がここに見えてくるのである。また新風という固有の俳諧を樹立するための困難さも見える。

江戸幕府は文化十三年（一八一六）二月六日に一条の触れを出した。江戸市中で忠孝を説く条件で「咄の会」を催すことを許可した。井筒屋の主人夏目成美はこの触れによって「随斎会」を催した。この会は文字通り「咄の会」であり「お斎の会」であり俳諧は二の次であった。江戸は文化・文政期を迎えると遊蕩ムードと浮華な世相と浮薄な文化が満ちるようになっていた。一茶は成美と親交を結び、しばしば成美に句の添削を依頼している。この会を通して一茶は自分の言葉で表現することを発見した。『我春集』の中で「心の古みを汲みほさざれば彼の腐れ俳諧となりて、行く行く理屈地獄の苦しびまぬがれざらん」と述べて観念的作品を否定し、新風を求めようとした。江戸座という成美の属する遊俳の軽妙さを知ったのである。葛飾蕉門に属しながら、芭蕉から蕪村へと発句の本情として生かされてきた季感と季題を切り捨てて、人情を述べるための素材の位置に退行させている句柄は、むしろ貞門、談林時代の扱い方に近い。

大根引き大根で道を教えけり
故郷は寄るもさはるも茨の花
蓬萊に南無南無といふ童かな
あら玉の年立返る風かな
うつくしや障子の穴の天の川
玉棚や上座して鳴くきりぎりす

これらの句は、当時江戸で流行していた趣味化し、観念化する季語観への一茶の全身的な反発であった。一茶自身の生活からは趣味化させるほど余裕のないという条件から出た自然発生的な傾向であったに違いない。一茶は芭蕉の句が談林調から出た自然発生的な傾向であったに違いない。滑稽が含まれ、風刺が折り込まれている諧謔性を見出していたのであった。観念の飛躍、雅俗の断絶に興味がつかない。俳諧性の回復と本歌取りに近い俳風はむしろ談林調に近いものでもある。一茶はこれらの句を自ら「新句」と言っている。

浅ましや一寸のがれに残る雪

せい出してそよげ若竹今のうち

人来たら蛙になれよひやし瓜

よい日やら蚤がはねるぞ踊るぞよ

下々に生れて夜も桜哉

身の上の鐘と知るつつ夕涼み

うかうかと人に生れて秋の夕

五十にしてふくとの味を知る夜哉

犬が来てもどなたぞといふ袈哉

この頃一茶が故郷長沼の門人、(注17)佐藤魚淵に宛てた書簡には「されば、私は九月三日、一日濡れ鼠となりて歩行候かげんか、又あまり新句を吐くゆへか、和歌三神の天窓敲き給ふにや、十一月初つかたよりひぜんといふ腫物、総身にでき申候」と記されている。「新句を吐く」としている点に一種の批判が内在されている。素材となつている季題は、その本意本情である伝統的な文学性が著しく希薄化され、消失してしまふか、或いは形式として置かれてはいるにすぎなくなつてしまつてゐる。一句が散文性を帯びたり、随想性を濃厚にするなどして、擬人化や説教調となつてゐる。こうした句柄はすでに一茶が江戸俳壇において一家を確立し、それ相応に認められていたことを意味している。文化九年から十三年にかけて一茶は夏目成美の特別添削を受けた。それによると一茶の「さをしかよ手拭かさん角の迹」という句に対して成美は「是は御家のもの」と評している。文化九年（一八一二）における一茶の一年間の句文を記したものに『株番』という句文集がある。巻頭に「文化九年正月十五日、下総国相馬郡布川の郷なる月船亭に日待といふことをして人々こぞりて夜の明るをなんまちける。」という冒頭で始まる長文が置かれてゐる。夜の明けるのを待つてゐるうちに、人々が様々なことを述べ合う。特に今年は丙午であるから六十年に一度の大凶日となるから大火にならぬように、という論を巡つて論争を開始し、

長頭丸の句を例えに引いたりしながら朝まで延々と大論争になつたと言う記事である。この文章の末尾の方で一茶は自身の俳諧に対する姿勢を述べてゐる。

程なく来見寺の鐘曉をつけて、布左台の鴉かははと鳴わたるに、おのおのばらばら帰りけり。是万人の定めたる大火によらんや、一人の極めたる天火にしたがはんや。思ふにふたつながら非なるべし。前の日しかじかの事あれば必あらんと思ひこみて、空しき株を守る輩にぞありける。されば我がたまたま練出せる発句といふものも、みずから新らしきとほこれば、人は古しとあざける。ふたたびよくよく見れば、人の沙汰する通りいかにも古く、ほとほとおのが心にもうんじ果て、三日ばかりも口を閉じれば、是又木偶人のごとくへんてつもなく、よしよし汝はなんぢをせよ、我はもとの株番。

ここに見られる「我はもとの株番」という呼称に対する一茶の態度に対して、それまでの『我春集』や『茨の花』などの文章に見られた「乞食首領」や「まま子一茶」という自称記述が、落魄不遇の自嘲やひがみなどの底の浅い境地より出たものでない(注18)。前田利治氏や矢羽勝幸氏は述べている。この自称は「在俗の覚めた境地がもたらした余裕のある戯号」とし「貧と信仰とを通して獲得したこの処世の哲学が、即、作品に反映していることは言うまでもなく、我はもとの株番に見られる透徹した他力的守護となつて定着し、俳仏一如の俳諧寺的世界へと展開してゆくのである」と述べられて一茶の信仰心を指摘されている。また前田利治氏は「要するに彼の句に見られる独自性なるものは、他力思想や中世風の無常観によつて、彼我の赤裸々な煩惱や観相などを当代の平易な口調で直裁軽妙に表現したところにある。批評に俳意が込められてゐるともいえる。それは同時代の俳人に見られない顕著な作風であり、郷土の桂国や文虎の言う一茶風にはば相当するものであつた。」と述べ、一茶の幼少時よりの門徒宗への帰依、長じてから親鸞の『正信念仏偈』と蓮如上人の『御文章』の日々の唱文が

強く働いていると指摘している。また一茶がこの時に得たり到った心境を熱心な信徒であった父の膝元で見聞体験を広め、法語類の読誦などの習俗・仏教の影響を強く受け、「我はもとの株番」という守愚一徹の自覚となり、やがて翌年の文化十年の故郷帰住を以って、自らを愚人とする自覚が習俗的信仰と合して他力思想の本道に結縁したと見ている。実際この句文集あたりから一茶の特徴的な句が目だつて増えていることは確かである。

陽炎や手に下駄はいて善光寺

しぐるるや親椀たたく唾乞食

かかる世に何をほたへて鳴く蛙

行きがけの駄ちに鳴やけさの雁

山鳥がおれがさし木を笑ふ哉

いたぶりし今の乞食よつつかすむ

御馳走にかもめなきそ角田川

木のはしの親をひたすらおがむ也

あのかたら三百文の桜かな

三日して忘れられぬか野良の猫

格別に世の中よしと鳴蛙

世の中は地ごくの上の花見哉

恥入てひらたくなるやどろば猫

なむあみだおれがほまの菜が咲た

嘉永五年（一八五三）に出版された『おらが春』はわずか二歳でこの世を去った愛しい子に対する追悼集であるが、一茶の生前は刊行に到らず永いことその存在すらもわからなかった。一茶没後この集は五度に渡って出版されたが、版木は関東大震災によって焼失絶版に到っている。この集の跋文は（注19）瓢界四山人が書いている。「しかもよく仏籬祖室をうかがひ、さる法師がつけられもあやからず、一休、白隠は猶しかなり」として兼好、一休禅師、白隠禅師に例えている。また上州草津の俳人黒岩鷲白の『芳草

帖』には「行状は彼の惟然房の昔を移して、業は鬼貫・蕪村杯の上を飛越、彼の深草の元政を的にかけたる俳諧上人」として（注20）広瀬惟然のようであると評している。口語や俗語を用いている所を惟然の風羅念仏にたとえたのである。また（注21）惺庵西馬は「ざれ言に淋しみをふくみ、可笑みにあはれを尽くして、人情・世態・無常・観想・残す処なし」と評しているように、一茶の独特の句風は、暁台の俳壇統合によって「花の本宗匠」の免許が出され、寛政三年に芭蕉が神祇伯白河家から「桃青霊神」の称号を授かり、文政九年には朝廷から「飛音明神」の称号を授かったことにより、これ以後の全ての流派が蕉門に属した中であつて極めて新しかったことは確かである。文化文政のころには俳諧は趣味化して独自性を失っていた。そんな中で一茶の独自の俳風は極めて新しく世の俳諧人に映つたのであつた。「金まうけ上手な寺のぼたん哉」の句や「でも僧や田植見に出る日傘かな」など、汗水流して働く農民と対照させることによつて墮落した僧侶の姿を際立たせているばかりか、今日「でもしか先生」と言われる現代の教育界の代弁とも思える「でも僧」を描いているのは痛快でもある。無気力でやる気のない僧侶をさげすんでいる点が面白い。

春風や侍二人犬の供

麦秋や子を負ひながらいし売

仰のけに落ちて鳴けり秋のせみ

三、他力本願と家族

一茶が浄土真宗に限らず仏教に深い知識と関心を持っていたことは、生い立ちや作品などから疑う余地はないが、一茶の喜怒哀楽を捉えた作品を単に一茶の性情や感情として「凡夫の境地」と捉える場合が多い。しかし一茶は僧侶だけに限らず支配層や大名・武士に対しても厳しさをのぞかせている。「秋の風乞食は我を見くらぶる」などその対極にある被差別者や弱

者、それにひたむきに生きるものに惜しめない拍手を送っている。「海坊主人見に出たる月見哉」「負けし菊を一人見直すゆふべかな」など滑稽な中にも人情や淋しさを詠んでいる。自らを弱小者と自覚し、幼少より辛酸な中に入れて育ったからである。また諸国を巡ってあらゆる階層の人々と交際を持ち、見聞を広め、人々と喜びも悲しみも分かち合い、自らのものとしていたからである。一方そうした一茶の生き方の中には「六欲兼備の俗物」という人もいる。一茶の評価はこのように格段の違いを見せてもいる。次の文章は句文集『株番』にある作であるが、このこともまた解釈の相違を見るようである。長い文章であるが全文を引用したい。

下総国相馬郡藤代の里に百姓忠蔵といふ者有り。朝夕のけぶりも糸筋のかすかにくらしして、夫婦人に雇われて老母の心をなぐさめける。其中に娘ひとり持ちたりけり。貧家のならひ、子守りといふ者もなければ、地べたに這廻りて、草花をとらへてあははをならひ、鳴子のうごきにてうちうちを真似つつ、そよ吹風の草木を友に育ちけるが、ことし八ツになんなりける。何にあやかりけん。其娘ただならぬ身となりて、かりそめのなやみもなく、九月三日といふに、彼の桃太郎のやうなるくりくりしたる男をなんうみたりける。其日より乳の出ること飲み口の詮ぬきたらんやうに、蕙の外迄ほとばしるものから、父母のよろこびはさら也。界限も打群がりて、「いまだ井筒のたけにもたらで、かかる愛度ためしは、今世にくらぶるものあらじ。永祿の昔を目の前に見る心ちす。」とてとりはやしつ、村よりむらへ咄つきいひふらしければ、やがて領主きこしめして、其男子の名をつけ下さるとなん沙汰し侍る。かかりしものから、野もせ山もせ其噂ひろごりて、誰しらぬといふ者なくて、人に人かさなりて其家尋訪ふものから、祝ひにおこせる産着、又は百文、或いは二百、あるは五十ばかりのおひねりといふもの、雪の降りたるやうにのみ累て、所々に山をなせり。二親久しき貧の病も忽に忘れて、今は心のままに老母をやしなひけり。げにげに此家のまづしさをすくはんとて、救世観音かれが子と現じ給ふにや。是を思へば、切る竹の節毎に黄金の

こぼれ出しといふ古きものがたりも、さらさらいつはりにはあらざるべし。是うきたる説にあらず。布川の月船といふ者、きのふわざわざ見にまかりけるに、其娘露ほどもはづかしきけしきなく、手遊びの偶人などをうみたるやうに人に見せけるとぞ。

下総国相馬郡、常州土浦土屋治三郎殿領藤代駅下町

百姓 久右衛門 死去

倅 忠蔵 申三十九

同妻 よの 三十

同母 かな 五十七

文化二年丑五月十一日生

同娘 とや 八才

此度従土浦候賜シ名也 九月三日生

男子 久太郎

このような見聞記は事実なのであるうか、その他にも乞食の小屋でお七夜祝いをしている場面に出くわしたりしたことを書き綴っている。一茶五十歳の年齢であるから故郷に帰住する一年前のことである。余りに長い一人身での子供に対する願望、或いは子供欲しさの幻想であったのであろうか。翌年一茶は齢五十一歳で帰住し、文化十一年（一八一四）四月十一日に常田久右衛門の娘「きく」二十八歳と結婚している。長きに渡る放浪生活の中で夢見た夢物語語であったものか、或いは事実であったものか定かではないが、こうしたことを記述していることは沢山あるので真偽についてはとかくいえない。文化元年に^{〔注22〕}山東京伝が『近世奇跡考』を著わし、^{〔注23〕}須藤由蔵が『藤岡屋日記』を著わしているので、あるいはそれらに似通わせて記したのとも考えられる。

一茶が書きとどめた江戸、房総、信濃での事件はさながら当時の十大ニュースともいえる内容である。文化四年の永代橋崩落惨事、文化十年の善光寺町一揆の顛末、文化十年の房総沖の難破船事故などは『藤岡屋日記』

といずれも照合できる。一茶の『七番日記』は文化七年（一八一〇）一月から起筆され、文政元年（一八一八）十二月まで八年間の雑記である。一茶の『七番日記』より数えて七年前の起筆の『藤岡屋日記』は明治元年までの記録である。一茶の句日記は現在十二集が確認されており、それぞれの自筆稿にある書名は『七番日記』を除き仮題がつけられている。その中の一書『享和二年句日記』は享和二年（一八〇二）一月から秋頃までの記録である。享和二年七月二十日の記事には「廿日晴、廿一日晴、野尻湖光・柏原観国来たれば、かのふや吉兵衛へ訪ふ。」と記され、次のような句を詠んでいるのである。

洪水の尺とる門よ秋の風

大あれのけもなき月の御殿山

草の蝶大雨だれのかかる也

助舟に親子をちあふて星むかひ

きりぎりすおよぎつきけり芥舟

古への水も見し人秋の風

我窓や虫もろくなはなかなぬ也

この年は異常気象の続いた年で六月二十日から諸国を大雨や洪水が襲った。一茶は『七番日記』に「洪水・箱根温泉場流失」と記している。この雨は七月六日まで全国的に降り続き、江戸とその周辺は甚大な被害を受けた。野尻の湖光と柏原の観国の弟子二人が来て江戸の大洪水の被害の話を話して、江戸に行き来している加納屋吉兵衛にその様を三人で聞きにゆき、聞いて句にしたものと思われる。この被害状況に対して幕府は何ら対策も救助の策も設けなかった諸藩の国許留守居役六十余名に対し、閣老は十月二十九日に厳重な処罰を申し渡している。この記事を読むとそうした状況が日を追って受け取ることが出来るように句も詠まれている。

享和二年には一茶の齢は四十歳で、父親の三回忌の法要に帰国している時であった。この日記は極めてジャーナリストイックな事件ばかりを記し

ているが、十年後の『文化十年句文集』には次のような一文を書いている。これも少々長いものであるが引用する。

渡守伊助といふは、ことし齢六十を超えたるに、一笠一蓑のかるき粧ひにて、さ、舟におのが命を任せ、さしこぐ竿を頼みて一鉢にさへとほしたつきながら、朝とくより暮るる迄、かひがひしうはたらきて、世渡るありさまの、さすがに尊く思はれ侍けるに、つらつら此の男の身の上を聞けば、ことさらに不便なるものから、きく人涙に袖を絞らぬはなかりけり。

此男、わかりしころ、牛出の鼻といふ所に住ひて、漁る業に日ごと猛々しき日暮しけるが、一年、秋の出水に上手の堤もろくも切れ、逆巻く波動々と鳴りわたりておし来たり、あはやと見る間に家もろ共波に巻き込まれて、駕のふすまの陸まじき妻も、いとしき子供二人迄いたましかかな、底の藻くづとさえ果てかげも容も見えざりけり。

しかるにこの男一人、ふしぎにも大木の枝に抱きつきて、命をながらへけるが、過世の罪業おそろしと思ひけん。其日よりふつと漁る業を捨てて、なき妻子の後生を供養とばかり、渡守と成り其身を如来の御前に投出して、何事もあなた様の御はからひとさしこぐ竿に願力こめただ称名念仏を此上もなき行とすとかや。いとあはれにも尊かりけり。さりながら天私なく覆ひ、地も私に載ることなしといへば、かかるありさまも、さるべき罪の報ならんと思へばうれたくもおそらしき事になん。

この記事を書いた翌年に、一茶は妻を迎えてようやく本当の家族と一家を持つに到るのである。一茶が生をうけた北信濃の柏原から南へ一日の行程に名利善光寺があり、北一日の所に親鸞流謫の跡直江津がある。仏縁に篤い土地柄で近世初期から門徒宗に帰依する者が多かった。一茶は幼少期から仏教に対し習俗的な慣行に従って生きてきた。文化四・五年の四十五歳のころから守愚の自覚を深め、その思想や文章はこのように仏教色を濃

くしてゆく。故郷に帰住した一茶は益々愚人としての自覚と他力思想を深めるようになっていった。浄土真宗の信仰は一般に講と呼ばれ、信者の多くが一所に集まり車座になって念仏をまじり唱える。その後信者同士、信仰をひとつにする同朋が各々の信仰体験の告白や宗祖の讃仰を通じて仏恩報謝を賛嘆した。近世期に入ってからには仏教が幕藩体制の中に組み込まれると、浄土真宗も檀家制度を採るようになり、寺院に帰属するようになるが、報恩講や説教などを通じ「自然法爾」の処世や思想が説かれた。

一茶は文化十年十月十二日に善光寺の近村長沼の経善寺で生まれた芭蕉の追善法要に臨席し、「何がしの芭蕉会」という一文を記している。形骸化し演出された芭蕉会を批判している。僧の真似をして座禅をしたりする行為を非難し、次に真宗の信仰の集いを具体的に説明している。同じく俳諧も形式化した隠者のような句を詠むのではなく「諸人が心のやり所」として楽しむ句会であるべきだと説いている。はからわれたものよりも、あるがままに、有為に対して無為を、技巧よりも自然を是としている点にこの文章の魅力がある。一茶はこのようにして一茶調と呼ばれる俳諧を樹立したのであろう。芭蕉に学び、芭蕉から離れて新風をものした一茶の努力の跡を見ることが出来る。中世より日本の芸道には「守破離」という觀念があった。芸も諸道も職業も、まず師に参入し、師の芸の模倣をし、師の芸を盗み、自身のものとなるまで修業に励む。修業を積んで同格になれば師匠から許しを得て独立し、更に自身の、己自身の芸を生み出すべくまた修業に励むことを言う。

何がしの寺に芭蕉会あり。門に蓑と笠とをかけたなり。しかるにけふは又ことさらに晴れたれば、さるもの、蓑に打水してそのぬれたるさまを見せたるも、かの翁の昔をしのぶにはおもしろき企にこそあれ、一念の信、俳諧に遊ぶともがらにはかかるわざくれの事も好しからず。此の身のこのままの自然に遊ぶこそ尊かるべけれ。

仏法を行ずといへば出家の真似して座禅にこび、儒といへば唐人になりたがるも皆おのれが平生をうしなへる病人にして、修業とは思ふべからず、と、かの翁もいましめられたり。今よひの集いは、炬をかこみて打くつろぎてこそ御心になかなひ侍りなん。

又、我が宗門にてはあながちに弟子と云はず師といはず、如来の本願を我も信じ人にも信じさすことなれば、御同朋、御同行とて平座にありて讃談するを常とす。いはんや俳諧においてをや。ただ四時を友として造化にしたがひ、言語の雅俗より心の誠をこそそのぶべけれ。

いざいざとおのれ先に大あくらして炬を囲めば、人々もさこそありなんとておのがじしくつろぎて楷火をつつき茶をすすれば、心のかまへ更に苦しからず。吹く松風の音もあるがまま、灯火のかけもしづかにて心ゆくばかりに興じけり。

実に仏法は出家より俗家の法、風雅も三五隠者のせまき遊興などの道にあらず。諸人が心のやり所となすべきになん。

この時から一茶は「其身其まま」や「から風の吹けばとぶ屑家」はそのまま、あるべきように「ともかくもあなた任せの年の暮」という生活に入る。一茶は文化十四年（一八一七）に五十五歳となり、これより信州にとどまり近隣の越後以外は一歩も他国に出ることはなかった。一茶の故郷定住と一茶調の布教とは実質的にこの年から始まったといえるのである。文政二年（一八一九）五十七歳でまとめた『おらが春』には「目出度さもちう位也おらが春」という句を置いて「門松立てず、煤はかず、ことしの春もあなた任せになむむかへける。ただ阿弥陀如来を信ずるのみ」という長文の前書きをつけている。長女さとが誕生し、一家も人並みな生活を送り、暖かい家庭生活を得た後の束の間の幸せを奪った無常の風、ここには崩壊してゆく家族・家庭の姿が描かれている。「露の世は露の世ながら去りながら」と詠んでも、戻ることのない、愛しい我が子の死に遭遇した一茶の心はいかばかりであったであろう。長男千太郎、次男石太郎、三男金三郎と次々に四人の子を失い、文政六年（一八二三）五月には愛妻「きく」を三十七歳で亡くし、一茶の家庭は完全に消滅してしまつたのである。俳諧も

また一茶にとつては、俳聖芭蕉の模倣をする亜流蕉風俳人との訣別を以つて、苦しい現実の中で悩みながら生きてゆく世俗大衆の、あるがままの「心のやり所」を表現吐露する庶民済度の文字でなければならなかったのである。それはまた趣味としての俳諧、業俳諧師との俳諧と決別し、真実の姿、おのれの生き様そのものをいかように五・七・五のリズムの詩に残すかという真の生き様に結びついた瞬間でもあったのである。

一茶にとつては当然のことながら善光寺を詠んだ句があまたある。文政五年の『発句集』には「八月二十九日、善光寺詣、本堂の柱に長崎の旧友たれかれ、八月二十八日詣るとしてありけるに、今は三十年余りの昔ならん、おのれ彼の地にとどまりて、一つ鍋のもの喰いて笑いののしり…」と書き「近づきの楽書見えて秋の暮」という一文を収めている。『七番日記』の文政五年九月の項には「善光寺の柱に長崎の旧友二日通るとありけるに、知った名のらく書き見へて秋の暮」と書いている。このように一茶はしばしば善光寺を訪ねている。

浴びるともあなたの煤ぞ善光寺

名月やお煤のすぎし善光寺

法談の手つきもかすむ御堂かな

暑き夜を唄で参るや善光寺

二番草過て善光寺参りかな

朝寒のうちに参るや善光寺

俗信家であったが、信仰心の篤かった一茶は、善光寺を主にして多くの句を詠んでいるが一部紹介した。こうした句の中に「文化十年二月、二十七日、少晴、松やに入、往生寺参詣」とあったり、「文化十五年三月、六雪、昼より晴れ、三好に入」と書かれている。善光寺の西北に六・七百メートル登った山の中腹に、安樂山菩提心院刈萱堂往生時があり、長野市西町には安養山極楽院西方寺がある。一茶はまたこの二寺もしばしば参詣している。

刈萱堂

子地藏よ御手出し給へ梅の花

花の世は仏の身さへおや子哉

花ちるや日の入かたが往生寺

西方寺

迹白は鳥のもちや西方寺

花散るや月入る方は西方寺

花の世は仏の身さへおや子哉

数えれば際限もない。一茶は善光寺、往生寺、西方寺を訪れてはこのような句を何百句も詠んでいる。刈萱は西方寺では「菫萱」の字を使い、石童丸は往生寺で「石童丸」となっている。明治の初め両寺は協議して刈萱が入寂した所は往生寺、石童丸が没したところを西方寺ということ合意をしたという話である。「あらおいたわしやな…」「これはまことか悲しやな…」と聴くものは勿論のこと、語るものも泣いて故郷の阿弥陀堂で瞽女や高野聖が語ったあの悲しい物語がある。瞽女の語る節回し、あの言葉の綾、説経節や浄瑠璃、琵琶歌として語られた、「かるかや」説教や「石童丸物語」とのゆかりの地が善光寺町である。そうした縁起を持った寺が善光寺町には二寺あった。「かるかや」は家庭崩壊の出家譚である。丹後若狭の和田の釈迦浜にある大穴は、信濃善光寺の本堂戒壇下に通じているという言い伝えもある。その言い伝えを現代でもこの地の人々は今も固く信じている。高野山に出家した父親、出家とはいえ俄かのことにてあれば、それは父親に捨てられた母親と男の子が、父親を探しに行く物語である。高野山に出家した父を求めて山に登る途中母親は命を落として山腹の西光寺に葬られ、今もここには墓もある。説経「かるかや」は石童丸と母親の登場で哀切を極める。出家をし、刈萱を名乗る父親が石童丸に嘘を言い、母親は疲れ果てて死ぬ段で、石童丸は大人世界のむごたらしさに気づき、世の無常を感じる物語であるが、一茶の生涯もまたこれに似たような生涯であった。

た。

ただいま説きたてひろめ申し候本地は、国を申さば信濃の国、善光寺如来堂の左手の脇に、親子地藏菩薩と斎れておわします御本地を、あらあら説きたてひろめ申すに、由来をくわしく尋ね申すに、これも大筑紫筑前の国、松浦党の総領に、繁氏殿の御知行は筑後筑前、肥後肥前、大隅薩摩の六か国、御知行御所をさえ四季を学うでお建てある。春は花見の御所、夏は涼みの御所、秋は月見の御所、冬は雪見の御所と申して、四季を学うでお建てあるが、頃はいつなることならん、三月はどうしゅうななばのことなるに、一家一族御一門、花見の御会とお触れある。

繁氏は一家一族の花見の会で突然の風に散る花を見て、世の無常を感じとり、一族一家がとめるのも聞き入れず「遁世してこそ後の世の、後生の種ではないかいな。」といって聞き入れない。奥方が「わたしの胎内には七月半の水子があります」と申すのだが、「いかに御台に申すべし。変わる心がないぞよと、変わる心のあるにこそ、深き恨みは召さりようずれ。この世の縁こそ薄くとも、またこそ弥陀の浄土にて巡り合おうぞ、同じ蓮の縁となろ」と言い残して身勝手に出家をしよう。一族一家の家庭崩壊劇の始まりである。出家遁世と言う方便を借りての出奔、失踪である。善光寺町の刈萱堂内には本尊の阿弥陀如来が祀られ、その右隣に刈萱上人像がある。その隣には上人が刻んだという地藏とその隣には石童丸が刻んだという地藏が祀られている。子の石童丸が高野山まで尋ね、弟子入りを迫ったので、父の刈萱上人は一度はやむなく許したが、親子の情愛に引かれると修業がおろそかになると考え、善光寺に参籠して正治元年（一一九九）にこの地に庵を結び、この寺を創出して地藏尊を刻んだという縁起がある。一茶はこの刈萱堂で「花の世は仏のみさへおや子哉」と詠んでいる。後に父を慕ってこの地までやってきた石童丸も父にならって地藏尊を刻み、建保四年（一二一六）七月に六十三歳で没したと言われている。この二体の地藏尊が刈萱親子地藏尊であると言われている。一茶の家庭も崩壊してし

まった。一茶の悲しみは筆舌に尽くしがたい。五十二歳でやっと得た妻、妻がもうけた四人の子供、一茶は五人の葬儀をしたのである。つかの間の家族と、ぬくもりのある家庭、それらが一瞬にして消え果、更に家までも大火で失ってしまったのである。説教節の「説経かるかや」を一茶はどのような思いで聞いたことであろう。この世に一人残された一茶は益々信仰心を深めていったことであろうことは確かである。

一茶はともかく蕉門の俳人であった。「春立や菰もかぶらず五十年」と詠んで芭蕉の生き方を慕った。しかも一茶は芭蕉のように生涯を独り身で終る勇氣はなかつた。やはりこの世に思いを残す荒凡夫であった。「初夢に故郷を見て涙哉」と詠んで暖かい身内が待つ故郷に帰住しなかった。「一日も我家ほしさよ梅の花」とも詠んだ。紅白の梅の花を見ては家族や家庭の暖かさを思い描いた。芭蕉も「わび」「さび」「軽み」「しほり」と肩肘張った俳諧から平談平俗のやさしさのある句に変わって行った。当然一茶もそれに倣い平淡な句へと変化して行った。その過程で一茶にとつて最も大切なことは「家庭」であった。家族と家庭生活とが一茶調という平明で童心に満ちあふれた独特の俳諧を生ましめたのであった。

【注】

〔1〕曾遊 元禄十六（一七〇二）〜享保十六（一七三二）、本名は鳥井裕誓といい、越後国出雲崎の敦賀屋五大当主。出雲崎での芭蕉俳文「銀河之序」を記念して『俳諧あまの河』を編む。京都にて客死する。別号は青白楼とも楚由とも名乗った俳諧作者。

〔2〕黒露 貞享三（一六八六）〜明和四（一七七七）、本名は山口守常。故あって享保中期に江戸を去り、諸国を流浪した。享保十五年に駿河国宇津木谷に「雁山の墓」を建立した。黒露と改号する前は雁山を名乗り、別号にうつ野山坊、草斎、稲中庵を名乗った。生涯に二十四冊の編著書を上梓し、素堂と親交を持った。

〔3〕錦江 享和元（一八〇二）〜万延元（一八六〇）。本名馬場小太郎源

正統。別号は紅白庵。古賀同庵の門には入り経義書資料文章を学び、召されて小十人組の番士に列する。弘化元（一八四四）に家督を相続し、二百二十八表付知の旗本となる。葛飾派八世の嫡男にして俳諧を父に学び天保十四年（一八四三）其日庵九世を継いだ。

〔4〕白芹 宝曆六（一七五六）〜文化十四年（一八一七）、別号を素水、桂洲を称し江戸日本橋馬喰町で宿屋を営む。安永六年（一七七七）に素丸に入門する。葛飾派宗家其日庵五世となったが、一時期、一門の組織固めのため一茶等と不和の関係となった。

〔5〕蕉風俳諧 芭蕉の樹立した俳風の意。歴史的には貞門、談林の遊戯的俳諧を脱却したところに最大の意義がある。奥羽行脚を期として一変し、古典的と日常的世界を調和させて花実兼備の俳諧を展開した。言葉の深いニュアンスを高度に追求した。

〔6〕普安 寛文七（二六六七）〜元文三（一七三三）、本名池田善左衛門、後に改め善兵衛。陸奥国津軽鰯ヶ沢の回船問屋。貞享四年に越中国金津から移住した。同九年近江彦根俳壇を受け継ぎ享保十年には『石舍利』を著し西津軽俳壇の中心人物となった。

〔7〕岡 山鳥 文政十年（一八二七）に雑学書の『江戸名者花暦』を著す。生没年是不詳、江戸時代後期の戯作者。江戸の人で下級武士であったが浪人をして滝沢馬琴に入門、後には式亭三馬にも師事する。通称を島岡権六といった。

〔8〕塩田冥々 寛保元（一七四一）〜文政七（一八二四）、本名は塩田為春といい陸奥国の蚕種業者。天明（一七八一）の中頃から加舎白雄に師事し、全国に蚕種を売り歩きながら俳人と親交を持った。矢羽勝幸、二村弘編著『俳人塩田冥々―人と作品』象山社、平成十五年十二月二十五日刊がある。

〔9〕雷太郎強悪物語 文化三年（一八〇六）刊行。式亭三馬作。安永五年（一七七六）生まれ。合本や滑稽本を中心に百数十点を発表した。

〔10〕幻住老人 近江国分山の中腹に曲翠の伯父の本多八郎左衛門がす

んでいた。芭蕉は元禄三年（一六九〇）にその旧庵を修理して提供され、「幻住庵」と名づけて在庵した。芭蕉没後はこの庵は同国の膳所の中の庄に移され、更に上別保に移して俳席とされた。

〔11〕樗良 享保十四年（一七二九）〜安永九（一七八〇）。本名は三浦元克通称を勘兵衛といい、別号は二股庵、無為庵などと称した。志摩国鳥羽のうまれで鳥羽藩士であった。寛保二年（一七四三）頃に致仕して伊勢の国山田岡本町に移住した。宝曆から明和三年（一七六七）ごろにある事件を起こして山田を出走窮乏の放浪生活を体験して帰郷し、俳諧宗匠となる。

〔12〕玄武坊 正徳二（一七一一）〜寛政十（一七九八）、本名水野氏、後に神谷氏を名乗る。医師、江戸白山下に住み、東武獅子門中興の人とされている。芭蕉ゆかりの深川臨川庵に京都双林寺にあった翁の碑を写して石碑を建立した。

〔13〕諸九尼 正徳四（一七一四）〜天明元（一七八一）本名は有井なみ。別号を波、湖白庵と称した。筑後国から島村の称や、永松家に生まれ、どうぞ句の中原村庄屋に貸したが、三十三歳の頃に有井浮風という旅の俳諧師と駆け落ちをして上阪し女性俳諧師となった。

〔14〕千代女 元禄十六（一七〇三）〜安永四（一七七五）加賀国松任の人で表具師福増屋六兵衛の娘。十二歳の頃に大睡から俳諧を学ぶ。十七歳の時に支考の訪問をうけ「あたまからふしぎの名人」と称される。その頃から諸国に知られるようになる。俳風は平俗であるが繊細な感覚で情緒的に優れた句が多い。

〔15〕有井浮風 生年不明、寛保三年（一七四三）に筑後国永松家の庄屋の婦人、波と駆け落ちし、上方から京都に住む。野坡門に入門し、野坡の高弟梅從亡き後、後継者となる。宝曆五年（一七五五）には京都九十九庵に住したが宝曆十二年（一七六二）に病死した。

〔16〕花嬌 没年は文化七年（一八一〇）、本名は織本園。上総国富津村の名主の妻夫の砂明とともに蓼太に師事する。一茶との交流も深く、編著

もある。紀行「すみれの袖」がある。

〔17〕佐藤魚淵 宝暦五（一七五五）～天保五（一八三四）、佐藤信胤信濃国水内群長沼の吉村家に生まれ、同郡の佐藤家を継いだ。後に法橋位に叙せられた漢方医。一茶の門人となり、二冊の句集を刊行している。一茶はこの人から民間療法の漢方を学んだ。

〔18〕前田利治 昭和三年宮崎県都城市生まれ。昭和二十九年早稲田大学国文科に入学、その後、大学院修士課程修了。昭和五十五年、五十一歳で没。武蔵野女子大学教授。1990、9、5に加藤定彦の編によって前田利治著『一茶の俳風』が刊行される。

〔19〕瓢界四山人 寛政十二（一八〇〇）～安政元（一八五四）、本名松平直興、別号閑花林・貞佐・瓢界などを名乗る。出雲国母里藩八代藩主。嘉永五年版（一八五三）の『おらが春』に跋文を書き、『自然堂千句』と『亀躍集』に序文を寄せている。いずれも小林一茶の千句と俳文を集めて出版した作品に愛着を寄せ、一休や白隠禪師に例えている。

〔20〕広瀬惟然 生年不詳、正徳元（一七一）没、本名広瀬源之丞。別号素牛・湖南人・風羅堂。美濃国岐阜を訪れた芭蕉に会して入門。奥の細道の行脚を終えた芭蕉を大垣に出迎えた。芭蕉に信愛され病没するまで随従し葬送にも奉仕し、芭蕉没後は風羅念仏を唱えて人々を驚かせた。

〔21〕惺庵西馬 文化五（一八〇八）～安政五（一八五八）、上野国高崎の人。左官職であったが江戸に出て惺庵を開き幕末期に江戸における宗匠として名を高めた。一茶を評して「ざれ言に淋しみをふくみ、可笑しみにあはれを尽くして、人情、世態、無常、観想、残す処なし」と絶賛している。

〔22〕山東京伝 宝暦十一（一七六一）～文化十三（一八一六）江戸時代中期の戯作者、浮世絵師。黄表紙作家として知られている。洒落本が風俗を乱したとして五十日の手鎖の刑を受ける。

〔23〕須藤由蔵 寛政五（一七九三）生まれ、没年は不詳。江戸時代後期の本屋。上野国藤岡の人。弘化二年（一八四五）から江戸で古書店を営

みながら、風俗や風聞を書き記して御記録本屋と呼ばれた。慶応四年まで書き続けた「藤岡屋日記」で知られている。別名藤岡屋由蔵ともいう。

〔別注〕

※塩田冥々との出会い

一茶と冥々の出会いに触れる直接の資料は未詳であるが、文政二年の『おらが春』には「ことしみちのくの方修業せんと、乞食袋首にかけて、小風呂敷せなかに負たれば、影法師はさながら西行法師らしく見えて殊勝なるに、心は雪と墨染の袖と、思へば思へば入梅晴のそらはづかしきに、今更すがた替へるもむづかしく、卯花月十六日といふ日、久しく寝馴れたる庵をうしろになして、二、三里も歩みしころ、細杖をつくづく思ふに、おのれすでに六十の坂登りつめたれば、一期の月も西山にかたぶく命、又ながらへて帰らんことも、白川の関をはるばる越ゆる身なれば、十府の菅菰の十に一つもおぼつかなし。「思ふまじ見まじとすれど我家哉」

さきの年の大なるに鳥海山はくづれて海を埋め、甘満寺はゆりこみ沼とかはりぬ。さすがの名どころも、まことにうらむがごとくなりけり。「象がたのかけを掴で鳴千鳥」―（略）―という文もあるので実際一茶が「奥の細道」の旅をしたかは不明である。

（受理日：二〇〇八年一月三十一日）

